法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<研究ノート>古典派経済学の外国貿易論(中の2)

TAKAHASHI, Seishi / タカハシ, セイシ / 高橋, 精之

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社會勞働研究 / Society and labour
(巻 / Volume)
15
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
99
(終了ページ / End Page)
122
(発行年 / Year)
1969-01-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00017837

《研究ノート》

古典派経済学の外国貿易論（中の二）

高橋精之

第三章　物価水準の国際的差異

一、問題の性格

二、スミスの場合―貴金属価格の国際的差異

三、リカードの場合―貨幣価値の国際的差異（以上既載）

四、シーニョアの場合―貨幣賃金の国際的差異（本号）

五、ミルの場合―物価の国際的差異（以下次回）

六、試論

四

N・W・シーニョアの名前を聞くと、私たちは、すぐ、彼の「最終一時間説」を思い出します。そこでもみられるように、彼の理論の特徴は、臆面もなく明快な形で俗論を語るところにあります。この点、同じく俗論とはいえ、その上に、わかりづらい表現で勿体ぶった長話をするマルサスとは対照的です。これは、恐らく、彼らが夫々代弁していた階級の当時の社会的地位の差異、そこから生じる気質傾向の差異を反映していたのでしょう。すなわち、マルサ

スの代弁した土地所有者階級が、社会に寄生し、「虚偽の社会的価値」にしがみついていたのに対し、シーニョアが代弁した産業資本家階級は、自分たちこそ歴史を進歩させるために働いているのだとすっかり思いこんでいました。ですから、シーニョアは、その自信満満の産業資本家階級の思考様式をそのまま無反省に「理論」化し、なんのためらいもなく、いや、それどころか、真理を説く啓蒙家のような気分で、人々にわかりやすく話したのです。その結果は、舞台裏をさらけだしながらの熱演です。用意周到にボロを隠すなどというケチな根性はこの陽気なイギリス人には少しもありません。このことは、他面、その理論を検討する私たちの方からすれば、シーニョアの理論の方が、マルサスのそれよりもずっと取扱いやすいことを意味します。しかも彼の話は、人々の表象をそのまま凝り固め、したがってまた、私たちの誰もがうっかりすると承認しかねない「自明のことらしきもの」を基礎にして展開されていますので、それは、私たちが無反省にぼんやり認めていることが、如何に誤謬の源泉になりうるか、私たちの頭の中にある「俗流的なもの」を自覚させてくれる点で、ひとつの効用ももっています。ここでこれから検討する彼の論文「貨幣を獲得する費用について」にもまた、彼のそういう性格がはっきりと現われています。

シーニョアがこの論文で問題の焦点に据えたことは、「貨幣賃金の水準が国によって異なるのは何故か、その原因およびその経済的意義」でした。リカードが貨幣価値の国際的差異を問題にしたとすれば、シーニョアは貨幣賃金の国際的差異を俎上にのせました。また、同じく賃金とはいえ、リカードが、一国資本主義社会の場で、他の階級の所得形態、すなわち、利潤、地代に対する賃金の大きさを問題にしたのに対し、シーニョアは、資本主義世界の場で、他国に比してのイギリスの賃金の大きさを問題にしました。また、リカードは貨幣価値の国際的差異の原因のみを問題にしたのに対し、シーニョアは、貨幣賃金の国際的差異の原因のみならず、そのことの有している経済的意義にも言

及しました。もっとも、この「経済的意義」は第四章の問題ですので、それはそのさい検討することにして、ここでは、「貨幣賃金の国際的差異の原因」に関する彼の説明が分析の対象になります。

まず、シーニョアの問題意識を誘った資本主義世界の事態は次のようなものでした。

「インドにおける労働の平均年賃金は一年に銀一ポンドから二ポンドである。イギリスにおいては、それは銀九ポンドから一五ポンドである。カナダの高地地方および合衆国では、それは銀一二ポンドから二〇ポンドである。同一時間内に、合衆国の労働者はインドの労働者よりも一二倍も多くの銀を獲得するし、イギリスの労働者はインドの労働者よりも九倍も多くの銀を獲得している。」(N. W. Senior, Three Lectures on the Cost of Obtaining Money, 1830, p. 1)

ところで、つぎに、貨幣賃金がこのように国によって異なるのは何故か、シーニョアはその原因を問題にします。そして、「労働者の必要生活費の差異」、「人口密度の差異」、「税金の差異」、「利潤率の差異」、「必需品の価格の差異」等、貨幣賃金の国際的差異の原因として世間でよく言われている諸説を紹介しては否定していったのちに、彼は自説を提起します。それは少し長いのですが、そのまま、紹介すると次のようなものです。

「私が述べてきた現象は、次のようなことを仮定する遣り方によってはじめて説明できる。すなわち、(銀の―引用者)生産国としてであれまたは、自国の現在の物価水準での一時的余裕金を持つ国としてであれ、いずれにせよ、自由に処分できる貴金属をもっている国が、一定期間の賃金と等価値の資本の前貸に助けられて、一人のイギリス人の一年間の労働が生産する商品に対して与えるよりも四分の一以上も多くの貴金属を、また、一人のインド人の一年間の労働が生産する商品に対して与えるよりも一〇倍以上も多くの貴金属を、一人の北アメリカ人の一年

間の労働が生産した輸出商品に対してすすんで与えると仮定することである。換言すれば、イギリス人は勤勉で仕事に熟練しているため、一人のイギリス人労働者は八人のインド人によって生産されるものと等価値の輸出商品を一年間に生産できると仮定すること、また、北アメリカ人の勤勉と熟練は、おそらくわれわれイギリス人よりも劣っているが、彼らが耕作している豊沃な土地の援助があるため、北アメリカの労働者は、一定期間に、イギリス人が生産するものよりも四分の一以上も多くの価値ある輸出商品を生産することができ、インド人が生産するものよりも一〇倍も価値のある輸出商品を生産することができると仮定することである。または、一層簡潔な表現を用いるならば、イギリスの労働はインドの労働よりも輸出商品を八倍も多く生産する。また、北アメリカの労働はイギリスの労働よりも輸出商品を四分の一だけ多く生産すると仮定することである。」（N. W. Senior, op. cit., p. 11～2）話の大筋は大体おわかりになったことと思いますが、この話はこれからいろいろ話を発展させてゆくさいの土台になる大切なところですので、私のいままでの例示と関連させながら、このシーニョアの話を図式的にすこし敷衍してみたいと思います。

いま、比較する国はアメリカとイギリスに限ることにし、比較される両国の商品はラシャとします。そして、一日間に対象化される労働量、すなわち価値量は六四〇分、両国の労働者の一日当りのラシャ生産量を、アメリカで一〇ヤール、イギリスで八ヤール、そして、いま話を簡単にするため、古典派経済学に妥協して不変資本部分（C）を捨象するとすれば、ラシャ一ヤールに含まれている価値量は労働の生産性の逆数で四対五、アメリカでは六四分、イギリスで八〇分になります。ところで、イギリスのラシャは、まえにも述べましたように、外国貿易において価値の割増評価を受けて九六ポンドで輸出されます。いまの場合、この価格が世界市場での市場規制価格になりますから、ア

メリカのラシャもまた一ヤール九六ポンドで輸出されます。他方、銀一グラムの貨幣呼称を六ポンドとすれば、ラシャ一ヤールはアメリカのにしてもイギリスのにしても一六グラムの銀と交換されます。このことは、他面、ラシャに含まれている価値一単位、すなわち、労働者の一分間の労働が獲得する銀量という面から考えるなら、アメリカの労働は〇・二五グラム、イギリスの労働は〇・二〇グラムの銀を獲得することになります。第3—4表はこの辺の計算を図式化したものですが、この差異こそシーニョアの強調したいところであり、貨幣賃金の国際的差異の原因であるといいたいところなのです。すなわち、「アメリカの賃金がイギリスの賃金より四分の一だけ高いのは、アメリカの労働の生産性がイギリスの労働の生産性より四分の一だけ高く、そのために、世界市場において、アメリカの労働はイギリスの労働より四分の一だけ多くの銀を獲得するからである」というわけです。もっとも、シーニョア自身は、煽動的な話のつねとして、このようにていねいに論点をすすめているわけではありませんが、論理不連続のところには必要な媒介項を入れ、話を図式的に示しますならば、このようになるのではないかと私は思うのであります。

第3—4表　シーニョアの理論の例解

	1人の労働者が1日に対象化する労働（価値）量（単位分）	1人の労働者が1日に生産するラシャの量（単位ヤール）	世界市場価格1ヤールのラシャの中に含まれている価値量（単位ポンド）	銀1グラムの貨幣呼称（単位ポンド）	1ヤールのラシャが獲得する銀量（単位グラム）	ラシャに含まれている価値1単位（1分間の労働が対象化したもの）が獲得する銀量
アメリカ	640	10	64	96	6	16	0.25
イギリス	640	8	80	96	6	16	0.20

しかし、それにしてもこの話はでたらめの連続です。理論の出発点になる前提もでたらめなら、その前提をふまえ

て推論してゆく過程もでたらめです。この場合、彼の陽性な気質そのままに、あけっぴろげに話をすすめるものですから、そのでたらめぶりには際立ったものがあります。その点を順次述べてゆきますと、

まず最初に、一般に、外国貿易論の成否はそもそも世界市場をどういうものとして理解するかにかかっていると言っても過言ではありませんが、その点をシーニョアについてみてみますと、私たちはそれがスミスの世界市場理解と同じであることに気付きます。すでに第一章および第二章でみましたように、世界市場理解には、そこで運動している商品の中に労働＝価値を見出すかどうか、見出すとしても国内市場におけると同じ意味かどうかによって、古典派経済学には三つの理解のタイプがあります。かのミルは、外国貿易論を労働＝価値抜きでおこないました。リカードは、世界市場の中にも労働＝価値を見出しましたが、国内市場とは別の形でそれを考えました。これに対し、スミスは、国内市場と全く同じ意味で世界市場に労働＝価値が存在すると考えました。これらの見解の相違がなにに由来し、なにをもたらしたかについては、すでに述べましたのでいまは省略しますが、古典派経済学の外国貿易論のこのような学説史の背景の中で、シーニョアの外国貿易論をみますと、私たちは彼の世界市場理解がスミスのそれと同じであることに気付きます。スミス同様、シーニョアは、世界市場には、国内市場同様、価値が成立し、しかも、そこには、これまた国内市場同様、一様な価値圏といいますか、等価交換の法則が作用していると考えます。古典派経済学の外国貿易論はシーニョアへきて、また振出しのスミスへ戻ったわけです。学問的にいえば、これではリカードの折角の苦心の成果も生かされていないわけで、リカードには気の毒の限りですが、政治的にいえば、これはまたひとつの尤もな狙いをもっていました。要するに、ミルが、リカードの比較生産費説の毒性に気付き、その毒性の根源で

ある価値を抹殺して、比較生産費説を骨抜きにしたとすれば、シーニョアは、比較生産費説そのものを無視することによって、人々を比較生産費説の害毒に感染させないという作戦にでました。この点がどのていど意識的であったのかについては彼自身なにも語っていない以上、正確にはなんともいえませんが、リカード以後のイギリスの経済学者がおしなべてそうであったように、シーニョアもまたリカードに潜在的敵意を抱いていたようで、ある個所では、彼はリカードを、「かつて哲学的名声を得たる学者の中で最も不正確な学者」ときめつけています。こういう心境の下では、当然のことながら、リカードの経済学から正しい教訓を学ぶことなどは到底不可能であります。

しかし、リカードの外国貿易論がスミスの外国貿易論のリアリティの欠如を衝き、その批判の上に成立したことをすでに知っている私たちからするなら、そのリカードの外国貿易論の成果を無視し、いまさらスミスに戻って一体なにができるのかと言いたくなります。時代はもう十九世紀、しかもシーニョアが理論的解決を志したテーマは、資本主義的生産様式の本史の世界史的発展の中で形成されたホットな問題です。ですから、ミルの外国貿易論が、リカードの比較生産費説を骨抜きにすると、反作用としてどんなに大きな理論的欠陥を自分自身がもつようになるか、そのよい例証であったように、シーニョアの外国貿易論もまた、リカードの成果を無視し、スミスの世界市場理解に立脚して、一八三〇年の資本主義世界の現象を解明することがいかに理論的に困難であるか、そのことを結果的に告白しているかぎりでは、ひとつの効用をもっています。そしてまた、私たちにしても、金が各国の貨幣制度、信用制度の共通の基礎になっていて、外国為替相場を媒介にして各国の価格が通約されていると、その表象にとらわれて、とかく、シーニョア流に、なにか国内市場と同じような同一平面の価値圏が、世界市場にも成立していると思いがちになるだけに、シーニョアの話は、そう考えるとどういう理論的困難に他方で直面することになるか、それを示しているかぎり

では反省させるものをもっています。実際、シーニョアのこのような世界市場理解では、リカードがその外国貿易論に賭けた問題意識、すなわち、「イギリス農業は大陸諸国の農業より生産性が高いのに、価格の点ではイギリスの穀物の方が大陸諸国の穀物より高いのは何故か」という、かの有名な問題意識を解決することができません。シーニョアのような世界市場理解では、イギリス農業の方が生産性が高いのなら、価格もイギリスの穀物の方が安くなる、ということになります。これでは現実の事態に合致しないからこそ、リカードがことさらに比較生産費説を提起したのだ、という点などは全然顧みられません。また、リカードは、あまり自覚しているわけではありませんが、世界市場が国家に分れていることをふまえ、事実上、「通貨制度の相違」、「貿易収支の均衡」ということを外国貿易論の中へ取入れています。それがあればこそ、「貨幣価値の国際的差異」というような、国家単位で生じている経済現象の原因解明に不十分ながらも成功したのでしょう。ところが、シーニョアの世界市場理解は全く世界市民的で、国境の入る余地がありません。したがって、「通貨制度の相違」も「貿易収支の均衡」も、どうでもよいことにとらわれている学者の趣味ということになります。彼自身、あるところでは、自分の理解した世界市場を次のように語っています。

「事実上、貴金属が携帯に便利で貴金属に対する需要が普遍的であることは、全商業世界を一つの国に、すなわち、そこでは、地金が貨幣であり、各国の住民は別々のクラスの労働者を形成するところの一つの国にしている。」

(N. W. Senior, op. cit., p. 14)

こういう世界市場理解の下に、国家単位で成立している経済現象の原因解明を試みようというのですから、これは、もう、「木ニ縁リテ魚ヲ求メル」ようなものです。

しかし、彼の世界市場理解が全く子供じみているということは、すなわち、彼の世界観が全く幼稚の一語につきる

という意味ではありません。最初の二章においてみましたように、外国貿易論の土台である世界観は、価値問題と生産力問題との二つから成立っていますが、後者の生産力問題については、シーニョアは注目すべき見識を示しています。

1。第3―4表にみられるように、彼は、賃金の国際的差異の原因を、生産力との関連で解明しようとしました。かんじんの世界市場理解がまちがっていたので、この志は上首尾に達成できたとはいえませんが、他の人たちが、「労働者の必要生活費」とか「利潤率」と関連づけて解明しようとしたのに比すれば、彼の洞察は、直観的とはいえ、事態の核心に触れていました。

2。その生産力の世界的分布についていえば、シーニョアは、それが資本主義諸国に不均等に分布されており、その不均等格差が貨幣賃金の国際的差異の原因になっていることを見抜いていました。価値問題では彼は素朴なスミス主義にとどまっていましたが、こと生産力問題に関しては、彼の世界観ははっきりリカードのそれに傾いています。

3。その生産力を、彼は、これまたリカードと同じく相対的な形で把えました。そして、資本主義社会では、競争・対立がその運動の原動力であり、したがって、すべてが比較的な形で問題にならざるをえないことを考えるならば、この生産力理解は資本主義社会の生産力理解としては全く事態に適合した理解でありました。実際、外国貿易論でも、ある国にとって問題なのは、その国の労働者が一日にどのくらいのラシャを生産できるかではなく、他国に比してどのくらいヨリ多くのラシャを生産できるかなのです。総じて、こういう話は調和論者のスミスにはわかりませんでした。ですから、彼は生産力を絶対的な形で理解し、したがって、「生産力が上昇すれば富は増加する」と、社会主義社会になってはじめて無条件的にいえることを資本主義社会の中で無雑作に述べました。他方、資本主義社会の対立

的性格の中にこの社会の行末の危険性を感じとったミルは、その外国貿易論にみられるように、生産力問題を理論の中から追放して、その不安を「解消」しました。生産力問題に対するこれらの古典派経済学者の取扱い方を背景に考えますなら、リカードが外国貿易論に生産力概念を持込み、しかも、それを相対的な形で展開したことの学問的意義は深く深く再認識される必要があります。

4。しかし、他方、この辺から、俗流経済学者とそうでない人との差が現われるのですが、同じく、生産力を相対的な形で問題にしたとはいえ、リカードが商品の売手と買手、彼の理論方法に即していえば、商品交換の当事者の間の生産力格差を問題にしたのに対し、シーニョアは商品の売手と売手の間の生産力格差を問題にしました。私がいまさらいうまでもなく、資本主義社会における経済的対立には、その基本的なものから順次言えば、第一に、雇う者（資本家）と雇われる者（賃金労働者）との対立があり、第二に、商品の売手と買手との対立があり、第三には、貨幣の貸手と借手との対立があります。そして、外国貿易論は、所詮、流通過程論の一分野ですから、第一の対立は問題にしえず、第二の、商品の売手と買手の対立から話がはじまることになりますが、その点から考えると、リカードが、外国貿易論としては出発点になる第二の対立に焦点を合わせて分析を深めていったのに対し、シーニョアは、この商品の売手と買手の対立にとって副次的な、売手と売手の間の対立を問題にして彼の外国貿易論を展開しました。勿論、このことが間違っているというのではありません。たしかに、商品の売手と買手の問題をきちんと解決したのちでしたら、売手と売手の間の対立から生じるこのことを問題にした方がよいでしょうし、リカードの外国貿易論にそれが欠けていたこともたしかです。しかし、それは、第一に、あくまで売手と買手との対立問題を解決したのちに、それをふまえてしなければならず、第二に、それは所詮、第二義的な問題なのです。ところが、シーニョアは、

商品の売手と買手の対立をふまえずに、したがってまた、それが外国貿易論における基本的論点であるかのような気持で、商品の売手と売手の間の対立を問題にしました。ですから、こういう話では、総じて、商品の買手というか、貨幣所有者が見失われてしまいます。一体、シーニョアの外国貿易論では、商品はどこの国へ輸出され、どこの国から貨幣を獲得するのでしょうか。古典派経済学では貨幣は、多くの場合、商品流通のこの世にとって外の桃源郷からやってきますが、シーニョアの外国貿易論でも、商品の買手、貨幣所有者、貨幣の獲得先が曖昧模糊としています。こういうところからも、私たちは、具体的に理論を展開する前に、学問の方法・順序をまず吟味してみることがいかに大切であるかを改めて知ることができます。

以上、四項目にわたってシーニョアの生産力理解を検討してみましたが、ここからもわかりますように、彼はこの点ではリカード派であり、資本主義世界の相対的性格、その中での生産力問題の理解の仕方についてはほぼ正しくわきまえていたといってよいでしょう。また、そういう鋭い現実感覚があればこそ、第四章にみられるようなその政策的提言が当時のイギリスの産業資本家階級の共感をよびおこしたのでありましょう。しかし、その折角のよい感覚も、その感覚が立脚している土台の世界市場理解がスミスの域を出ていないため、台無しになってしまっています。そして、スミス流の世界市場理解とリカード流の生産力理解の混和した、このようにチグハグな世界観にもとづいて外国貿易論が展開されるとき、その外国貿易論が論理感覚のわるさと現実感覚のよさの交錯の下に進行するであろうことを、私たちは前以って十分に予想することができます。

つぎに、この世界観から賃金水準の国際的差異を導きだしてゆく推論の部分に目を移しますと、ここでもまた、シ

ーニョアの話には粗雑きわまりないものがあります。その点を順次指摘してゆきますと、

1。まず、話の本筋に入る前に、あらかじめシーニョアの推論の全体としての性格について言えば、それは要するに、同一商品の生産性、したがってまた価値が二カ国で異なっていても、世界市場ではそれらの商品は同一量の銀＝貨幣を獲得するという事態を逆の面から理解して、銀＝貨幣を一グラム獲得するに必要な労働量は生産性の高い国ほど少なくてすむ、一分間の労働に対する銀＝貨幣での評価は生産性の高い国ほど大きいという話ですが、こういうことだけなら、なにもひとり銀＝貨幣に限ったことではなく、あらゆる他の商品の獲得費用についてもいえることです。この辺からも、シーニョアの話は損得問題には関係あっても、貨幣賃金や物価の問題ではないのではないかという見通しがついてくるのですが、J・S・ミルは、この点を次のように述べています。

「したがって、これから、各国は、その労働の一般的効率に比例して、その輸入品をヨリ小さい費用をもって取得する、という結論がでてくる。この命題をはじめて明確に認識し叙述したのは、シーニョア氏である。ただ、しかし、シーニョア氏はそれを貴金属の輸入にのみあてはまるとしていた。私には、この命題が、これ以外のあらゆる輸入商品についても真であるということ、さらに、それはわずかに真理の一部分に過ぎぬということを指摘することが、重要なことであると思われる。」(J. S. Mill, The Principles of Political Economy, 〔1st ed. 1848〕, Ashley ed., 1909, p. 605, 岩波文庫訳、第三分冊、三一九頁)

2。まあ、この点はゆずって、シーニョアのいうとおり貴金属＝銀＝貨幣にのみあてはまるとして、話の本論に入りますと、彼は、第3―4表から、アメリカのラシャ生産に従事する労働者の一分間当りの労働と交換される貨幣量がイギリスのそれに比して四分の一だけ多いと、それはアメリカの賃金がイギリスの賃金に比して四分の一だけ高いこ

とを意味すると推論しますが、ここには、明らかに労働と労働力との混同、または、労働の価値と労働力の価値との混同があります。ここでの問題の性格は、地代論における差額地代の問題と同じように、世界市場での価格を規制する最劣等生産性の資本（イギリス）よりも生産性の高い資本（アメリカ）の生産物でも、市場では「一物一価の法則」により同一価格で販売されることから生じる問題であり、したがって、そこに発生するのは、超過利潤、高利潤ではあっても高賃金ではありません。生産手段を自分で所有している、いわゆる単純商品生産者ならいざ知らず、資本主義社会では生産物と労働との間には資本が介在し、労働の生産性は資本の生産性に吸収されてしまうのですから、労働の生産性の高いことが賃金の高いことにつながるという保証はどこにもありません。この場合でも、アメリカの資本家が平均利潤の他に超過利潤を獲得することは確かですが、そこで働くアメリカの労働者の賃金がイギリス以上になるという保証はどこにもありません。もっとも、超過利潤を獲得するような企業または国では、労働争議の防止費用として、その超過利潤の一部分を労働者にお裾分けすることがあるかも知れませんから、その場合には、その企業またはその国に働く労働者の賃金が高くなるということもあるでしょうが、それはまた別の話であり、それにそれは、必ずそういうことがおこなわれるとはかぎらない不確かな、理論としては取扱えない話です。要するに、シーニョアは、他の古典派経済学者の真似をして労働力と労働とを混同し、ラシャに含まれている一分間の労働がヨリ多くの銀＝貨幣を獲得すると、そのことがとりもなおさず、一分間の労働に対する貨幣報酬＝賃金がヨリ多くなることを意味すると考えるのであります。しかし、賃金は労働力の対価であって労働の対価ではなく、したがってまたそれは、本来的には、労働時間の大きさとは無関係の存在であります。

3。ここでもまた一歩ゆずって、シーニョアのいうことが成立し、アメリカの輸出産業であるラシャ産業に従事す

る労働者の賃金がもし高くなるとしても、それは所詮、その輸出産業の範囲内だけの話、シーニョアのいうように、その高賃金がアメリカの他の産業にも波及してアメリカが全体としても高賃金の国になるという保証はどこにもありません。シーニョアはアメリカのラシャに含まれている価値がイギリスのそれよりもヨリ多くの貨幣と交換され、したがってヨリ多くの貨幣評価をうけることは、とりもなおさず、アメリカの価値全体がヨリ高い評価を受けることになると考えているようですが、輸出商品であるそのラシャに含まれている価値は、別段、アメリカの価値として国民的刻印を押されているわけではないのですから、そうなりようがありません。この辺にくると、シーニョアの世界市場理解が決定的なガンになっているのでありまして、世界市場から国境を捨象し、世界市場を国内市場と同じに考え、アメリカのラシャ産業とイギリスのラシャ産業とを無媒介的に直接比較検討するシーニョアのような遣り方では、スミス同様、個人経済学や万民経済学はできるとしても、国民経済学、すなわち、国民的規模で生じている経済事象の分析は、能力の問題は別としても、そもそも不可能なのです。この場合でいいますなら、各産業の生産力がその国家の有している生産力として集約され、そのように集約されたものとしてのアメリカとイギリスの国家全体としての生産力水準の比較を媒介にして、アメリカのラシャ産業とイギリスのラシャ産業とが間接的に比較検討されなければならないのです。そしてそのような理論手続きを経済学の土台である価値論の段階から確立するためには、スミス、シーニョア流の世界市場理解が徹底的に批判されなければなりません。

4。ところで、シーニョアは、いままでみてきましたように、労働と労働力とを混同し、アメリカの価値一単位がヨリ多くの貨幣を獲得するといいますか、ヨリ多くの貨幣と等価になることから、アメリカの高賃金を説明しようとしましたが、この遣り方は、はしなくも、他方で、アメリカの物価が高いことを説明することにもなりました。すなわ

ち、アメリカのラシャに含まれている価値一単位はイギリスのそれに比して四分の一だけ多くの銀と交換されるのですから、シーニョア流にいえば、アメリカの価値は全体として、イギリスの価値より四分の一だけ高く評価されることになり、アメリカはイギリスに比して四分の一だけ物価の高い国になります。シーニョア自身は、貨幣賃金水準の国際的差異の問題に重点をおいていたので、物価水準の国際的差異の問題に直接触れていませんが、実質的には、折に触れて、貨幣賃金の上昇が名目的なものであること、すなわち、その裏で物価も上昇しており、したがって、一国の中だけで考える限り、実質賃金は上昇していないという考えを示しています。ですから、そのかぎりでは、シーニョアの理論は、物価水準の国際的差異の原因も示唆しているといって過言ではありません。古典派経済学者の話には、一般に、怪我の功名のような話が多いのですが、シーニョアもまた、労働力と労働を混同したばかりに、主観的には、賃金の国際的差異の原因を説明しようと志しながら、結果的には、物価水準の国際的差異についても語ることになりました。もっとも、それがうまくできているかどうかは別のことであります。

ところが、シーニョアの理論は、こういう面から考えると、物価水準の国際的差異を説明しているとはいえ、他面、彼が推論の土台にしている場面設定の方からいうと、物価水準は各国間で同じということになります。すなわち、さきにもみましたように、シーニョアの理論の要点は、輸出商品の労働の生産性が国によって異なっていても、世界市場では、「一物一価の法則」により同じ価格で販売されるというところにありました。しかし、各国の同じ種類の商品が同じ価格で販売されるものならば、各国の物価水準は同じということになり、すくなくとも、差異があるという話はできなくなります。シーニョアの理論は、この点を考えると無茶としかいいようがなく、一方で、同一商品同一価格を理論の前提にしておきながら、他方、その前提から出発した理論的帰結の方では、国によって物価水準

が異なることについて語っているのです。これは、前提から帰結に至る推論の過程のどこかに誤りのある明瞭な証拠であります。J・S・ミルのように、資本主義世界の生産力分布の構造的不均衡をなんとか隠蔽したい人にとっては、シーニョアの話のこのような矛盾は、物価水準の国際的差異の原因を生産力水準の国際的差異に関連させて説明しようとしたシーニョアにケチをつけるいい材料になります。

「イギリスの労働の効率の大であることが、イギリスが他の大概の国々よりもヨリ小さい費用をもって貴金属を入手している主な原因であるとシーニョア氏が指摘したのは、正当であるけれども、それが、また、貴金属の価値が低いことを、諸商品を購買する力が小さいことを説明するといっているのは、私は承服することができない。」（J. S. Mill, op. cit., p. 609, 岩波文庫訳、第三分冊、三二六頁。なお、傍点は原文でイタリック字体の個所）

シーニョアが貨幣賃金水準の国際的差異の話にとどめ、推論の部分だけからいうなら、ヨリ妥当性のある物価水準の国際的差異については表立って議論をしなかったのは、この辺の理論的矛盾になんとなく気付いていたためかも知れません。

5。しかもその上、貨幣賃金水準の国際的差異としてであれ、物価水準の国際的差異としてであれ、シーニョアの話にはもうひとつの論理的矛盾があります。すなわち、いま、イギリスとアメリカは小麦を輸出し、アメリカとフランスは靴を輸出し、フランスとイギリスは帽子を輸出しているとし、かつ、その労働の生産性はそれぞれ第3―5表のようであったとします。シーニョアの理論でいきますと、こういう事態の下では、イギリスの賃金はアメリカの賃金より三分の一だけ高く、アメリカの賃金はフランスの賃金より三分の一だけ高く、フランスの賃金はイギリスの賃金より三分の一だけ高いということになります。しかし、こういうことは数学的にいってありえません。甲が乙の三

分の四で乙が丙の三分の四ならば、甲は丙の九分の一六になる筈です。甲が丙の四分の三になるなどということはありません。それに、そもそも、賃金水準が絶対的な形ではなく、比較的な形で問題になっている以上、すべての国が高賃金の国になるなどということは論理的にいってありえません。ここからもシーニョアの理論に欠陥のあることがわかります。

しかし、どの商品も同一視したこういう批判を聞いたら、シーニョアはきっと、「ある国の賃金水準を他の国に比して高くするのは、ある種の商品の輸出の場合だけだ」と反論したことでしょう。事実、シーニョアは他の個所では次のように述べています。

「もし、われわれが同じところにとどまっているならば、われわれの競争国の前進的改善がわれわれの優越を破滅させ、もし、われわれの前進が競争国ほどでないなら、わが国の優越を減少させるということにわれわれは気付くであろうし、われわれの進歩は、最も生産的であることが知られている方面へ全く自由に産業が流れこんでゆくことを許すことによってのみ維持し加速できることに気付くであろう。」(N. W. Senior, op. cit., p. 24, なお、傍点は引用者のもの)

第3—5表　三カ国の労働の生産性

(単位　1日当りの生産量)

	イギリス	アメリカ	フランス
小麦(1キロ)	4	3	—
靴(1足)	—	4	3
帽子(1個)	3	—	4

この場合、問題は、「最も生産的であることが知られている方面」であります。実際、このことは、経済学に興味ある問題を投げかけています。どういう商品でも輸出してさえすればいい、どういう商品でも他国より生産性が高くさえあればよい、という問題ではないということです。換言すれば、どういう商品を輸出し、どういう輸出商品で他

国に優っているかが問題だ、というわけです。この点でも、リカードの外国貿易論は示唆に富んでいます。すなわちそのさいにも示しましたように、リカードの外国貿易論では、ラシャを輸出しているイギリスは富み、ブドウ酒を輸出しているポルトガルは貧しくなります。そして私は、そういうラシャのような商品を先進的商品、ブドウ酒のような商品を後進的商品と仮に名付けました。実際、資本主義世界の中でいまだかつて茶やブドウ酒を輸出して強大になった国はありません。国内交易論ならともかく、外国貿易論では、ラシャとブドウ酒を一括して商品一般として取扱うことはできないのです。そしてこの点が、何故そうなのかが、外国貿易論で、しかも価値論にもとづいて解明されなければならないのです。ミルのような没価値的、没生産力的な外国貿易論では、こういうことは総じて問題になりませんし、できもしません。それだけでもミルの外国貿易論の学問的程度のほどがわかります。この点、シーニョアの場合には、問題の所在におぼろげながら気付いています。彼が輸出商品の生産性の上昇にイギリス資本主義の将来がかかっていると考えるとき、念頭にある商品は、帽子でもブドウ酒でもお茶でもなく、実際に当時のイギリス資本主義の繁栄を支えていた綿製品だったのです。その主観的狙いは心痛いほどわかります。しかし、この俗流経済学者は、それを「最も生産的であることが知られている方面」と曖昧にしか表現できないのです。しかも、その議論の組立の中には、その予感さえ生かされず、輸出産業を一般的に限定なしに規定し、そのかぎり、輸出産業なら、なんにでもあてはまることとして話を展開しています。ですから、彼の理論そのものは第3―5表の示すシーニョア批判に反駁できないのです。そうであるなら、私たちもまた、気持はわかる、などという話は総じてすべきではありませんから、シーニョアの理論を冷く否定するより他ありません。なんの工夫もなくスミスの真似をし、諸生産物の間に、または諸生産部門の間に、生産力面から考えた区別もつけずに、諸生産部門同質主義を貫く以上、そしてまた、何故

に、とりわけ綿製品の輸出の場合だけは高賃金の原因になって、小麦、靴、帽子の場合にはそうならないのか、その点に深く思いを致さないままに軽率な話をしている以上、こういうアラ探しのような批判をされても仕方がありません。

最後に、以上、私は、シーニョアの理論の前提および推論の両面にわたって、彼の理論の難点を指摘してきました。実際、それは難点だらけで義理にもほめるわけにはゆきませんが、彼の話の中に良いところが全くないというわけではありません。私の思うに、彼が経済事象の量的大きさを、とりわけ、賃金の大きさを、国際的視野の下に、国際比較において問題にしたことは、物の考え方にひとつの新しい局面を切拓いたという点で、あるていど評価してもよいのではないかと思います。といいますのは、従来、古典派経済学は国家を社会と考えたこともあって、一国資本主義社会の中だけで閉鎖的に経済学を考える傾向がありました。ですから、たとえば賃金の大きさなどにしても、一国社会の中だけで、むかしといまの水準を比較したり、現在における他の所得形態、すなわち、利潤や地代とその大きさを比較したりしました。勿論、こういう考え方はそれ自体間違ったことではなく、いや、それどころか、こういう考え方があればこそ、搾取や、資本と賃労働との対抗関係も明らかにすることができたわけですから、この方法は、まず、第一義的にすべき大事なことですが、一国の外に世界があり、他国がある以上、賃金の量的大きさの比較的考察はそれだけにとどまってはいられないでしょう。どうしても、国際的比較ということも検討の中に入れてゆかなければなりません。そして、その問題に意識的に取組んだ人こそ、シーニョアでした。

すなわち、それまでの古典派経済学の伝統からすれば、問題はすべて一国社会内部の場面において考えられるのですから、賃金の場合も、賃金が高いということは、他の所得、とりわけ、利潤に比して高いのであり、それとの対抗

関係において賃金の大きさが問題になりました。こういう考え方は、リカードにおいて典型的に現われ、そこでは、一日の労働時間が一定であるかぎりは、生産力がいくら上昇しても一定である「一日に生みだされる価値量」の分け前として賃金が問題にされたため、資本と賃労働の対立関係は、妥協のできないぎりぎりのものとして表現されました。これに対し、シーニョアの場合には、賃金が貨幣賃金＝名目賃金という点で、しかも、他国との比較において問題にされます。この場合には、賃金が高いというのは、他国、たとえば、インドに比して高いのであって、利潤に比して高いのではありません。

ところで、経済学におけるこのような新しい観点の導入、したがってまた、経済事象の量的大きさの比較のさいの基準の変更は、経済諸事象間の因果関係の理解についても新しい局面を切りひらくことになりました。このことは、とりわけ、物価と生産性、賃金と生産性についていえます。すなわち、いままでの人、たとえば、リカードが、「生産性が上昇するにつれて物価は下落する」と述べていたのに対し、シーニョアは、リカードの神経を逆撫でするように、「生産性が上昇するにつれて物価は上昇する」と述べます。また、実質賃金を一定とすれば、リカード流の考えでは、「生産性の上昇につれて名目賃金は下落する」ということになりますが、シーニョアの考えでは、「生産性の上昇につれて名目賃金は上昇する」ことになります。念のためにいいますが、この一見相反する二つの命題は、その実、別段、二者択一の命題として存在しているのではありません。ただ、なにと比較して、「上がる」、「下がる」という言葉を用いているのか、比較の基準が異なることによって生じる外見上の対立であります。シーニョアは、まえにみましたように、国際的視野からするこの事態の原因を上首尾に解明することはできませんでしたが、このような事態そのものは現実に存在しており、したがって、リカードの命題が成立するのと同様、シーニョアの命題もまた、成

立します。

ところが、シーニョア自身は、経済学に国際的視野を入れ、「上がる」、「下がる」という言葉遣いの基準を変更し、このように一見、リカードに対立する命題を打出すことによって、どうも、暗にリカード批判を考えていたようです。たとえば、「穀物価格が上がるにつれて賃金は上がる」というリカードの考えを、シーニョアははっきり否定します。

「穀物の平均銀価格が労働の平均銀賃金に依存しているのであって、労働賃金が穀物価格に依存しているのでないことは明白である。」（N. W. Senior, op. cit., p. 6）

要するに、「外国にくらべて賃金が上がるということは、一分間の価値当りの銀獲得量が増大していることを意味するのだから、穀物価格は上昇する」というのです。また、リカードは、「賃金の上昇につれて、利潤は減少する」と考えて、資本主義社会の将来に悲観的見通しを立てていましたが、シーニョアは、「高賃金は心配するに及ばない」と強気な話をしています。

「最初の講義課程でいくぶん見越していたことであるが、現在の主題に関係して最後に述べておきたいことは、イギリスにおける一般的に高い賃金率は我々を外国との競争に向かないようにするという意見の馬鹿馬鹿しさである。外国人との我々の競争力は、我々の労働の効率に依存しているのであることは明白であり、高い賃金率はその効率の必然的結果であるように思われる。」（N. W. Senior, op. cit., p. 26～7）

この場合、シーニョアの話はこのかぎりでは現実の事態を正しくとらえています。ただ、それが、リカードと異なった観点からの問題の取扱いであり、したがってまた、そのことの正しいことはなんらリカードの理論の否定にはなら

ないという点がはっきりしていない限りでは、それは容易にリカード批判の詭弁に転落します。そして、実際、マルサスのように悪ずれのした人間の手にかかると、このような話は、早速、リカードを批判し、地主の経済的地位を擁護するための駄弁のタネに用いられます。すなわち、かつてリカードは資本主義社会が発展するにつれて穀物価格が騰貴し、そのことは、一方でヨリ劣等の土地での穀物生産を媒介にして地代を大きくするとともに、他方で、賃金を大きくし、利潤を圧迫してゆくと考えました。これがリカードの描いた資本主義社会の歴史的傾向であり、資本主義社会の終末図でした。リカードは例のとおりの性格ですからこの事態にあまり価値判断を下しませんでしたが、多くの人々は、この話から、地主はイギリスの社会に寄生するコブのようなものだとの印象を受けました。実際問題としても、地代は、資本主義社会の発展とともに、それ以上のテンポで増大し、その結果、産業資本の蓄積および労働者階級の生活に重圧を加えます。そのため、地主は、産業資本家および賃金労働者の双方から、人々の生活を苦しめる寄生虫、社会の敵として批判されるようになります。この事態は、このまま放置しておきますと、土地国有化論に発展し、土地の私有権は制約されるようになりかねません。そこで、イギリスの地主は、この社会的非難をなんとかイデオロギー的に逸らせる必要がありました。「必要なところへは必ず理窟がやってくる」の言葉どおり、丁度このとき、地主階級のイデオローグであるマルサスはシーニョアのこの話からまたとないヒントをえました。イギリスの貨幣賃金が高いのはイギリスの製造業の生産性が高いからだとすれば、イギリスの貨幣地代が高いのもそのためではないか、そうとすれば、貨幣地代の高いことは喜ぶべきことの表われでこそあれ、文句をいわれる筋合いはない、とマルサスは考えたわけです。そこで早速、彼は、一八三六年に出版された「経済学原理」の第二版に、次のような文章を挿入しました。

「イングランドにおける穀物のヨリ高い貨幣価格は貨幣のヨリ低い価値（念のためにいえば、「他国に比して」の意味―引用者）によってひきおこされているのであって、穀物を生産するのに必要とされる労働の分量の増大および他の供給の諸条件によってひきおこされているのではないということに必然的になるのである。」（T. R. Malthus, The Principles of Political Economy, [1st ed., 1820], 2nd ed., 1836, p. 186, 依光訳、上巻、二五五頁、なお、この文章は初版にはない）

ここには、明らかに話の論理的ごまかしがあります。一国の生産力水準が高くなるにつれて穀物価格が他国にくらべて高くなることは、リカードも外国貿易論で、貨幣価値の国際的差異を媒介項にして述べていることであり、たしかなことです。しかし、この場合、高いというとき、比較の対象になっているのは他国の穀物であり、問題が国際的視野においてとらえられているのです。ですから、そのことの是認は、だからといって、イギリスの穀物価格や地代が利潤や賃金に比して高くなることの原因が、「穀物を生産するのに必要な労働の分量の増大」にあると述べたリカードの地代論の否定には決してなりません。リカードは一国社会の場で述べたのですから。マルサスは資本主義世界の場および一国資本主義社会の場での二つの異なった事柄が、ひとつの同じ言葉、「穀物価格が高い」という言葉で同じく表現されるのをよいことにして、二者択一的な形で問題を提起し、そういう問題設定の下に、シーニョア的説明を楯に取って、「地主は社会のコブである」ことを示唆しているリカードの理論を否定し去ろうとしました。マルサスの次の言葉は、彼のこの辺の心仄しい考えを露骨に語っています。

「もしわれわれが、さまざまの国における、また、同じ国のちがった時期における貴金属の価値を、かれ（スミスのこと―引用者）自身が提案したように穀物価格によって測定するならば、……粗生産物の高い平均価格よりもたし

かな富の微候はほとんどないように、わたしには思われる。……一国の繁栄した状態の最もたしかな証拠のひとつにわれわれが不平をいわないように、右の点をたしかめることが重要である。」（T. R. Malthus, op. cit., 1st ed., p. 198～9, 岩波文庫訳、上巻、二九三～四頁）

しかし、重要なことは、シーニョアの話をこのように悪用することではなく、リカードの世界観にもとづいてシーニョアの指摘した事態を理論化することです。

（第三章未完）